関西発、新進アーティストと銘酒のマリアージュ本“ワジア”

The WJAA NO.5

West Japan Art & Alcohol Free magazine 2015 SPRING

Alcohol
Nine Leaves
竹廣株式会社 ナインリーヴズ蒸留所

×

Artist
Miki Wanibuchi
わみぶち みき

境界線の
先にあるもの

What you see beyond the boundary line.

ひとつの線が、
世界を「あちら」と「こちら」に分けています。

目に見える壁、外と内を隔てるガラス窓、自分と世界を隔てる皮膚。
スカイプをつなぐ PC モニター、国境、成層圏、三途の川、僕とあなたの心の距離。
目に見える境界線もあれば、見えないものも。
どれもがその向こうに手に届きそうで、なかなか届かないものばかり。
そしてそれを超えた先には、何かが待っていそうな期待感。
だからこそ求め、想像して、
その何か分からない、ふわっとした、ただ確かに存在する「線」越えたいと思う。

今回のキーワードは「境界線」
作家は向こう側に広がる世界を想像し、そこへと続く線を描き
仕事人は毎日そこに立ち、理想に向かってお酒を作り生み出している。
それぞれにとっての境界線は何なのか。
本編でじっくり確かめて下さい。

あなたの境界線は、
そしてその先に待っているものは、何だと思いますか？
アートとお酒を前に据えて、一緒に考えてみましょうか。
「その先」と対峙する、二人の姿を見ながら。

text by Nakatsuka Yasuhiro

Artist 005

わにぶちみき

彼女の描く境界線
その線は面となり空間とつながり
鑑賞者と対峙し
その先に無限の世界をみせる

The boundary line, which she depicts,
transforms into a plane surface, is connected with space,
confronts the viewer, and
shows us the infinite world beyond it.

1981　大阪府生まれ。現在、大阪を拠点に制作活動中。

2012　英国ボーンマス芸術大学大学院美術修士課程 修了
2004　近畿大学文芸学部芸術学科造形美術専攻 卒業
　　第27回ホルベイン・スカラシップ奨学生（2012-2013）

SELECTED SOLO EXHIBITIONS
2015　Styling Art Exhibition "Esprit Dandyism"（阪急メンズ大阪／大阪）
2014　オープンアトリエ（studio ém／大阪）
　　Touch the boundary（Contemporary Art Gallery Zone／大阪）
　　Walking in Tenma Project（天野画廊／大阪）
2013　Touch（gallery CLASS／奈良）
2012　BOUNDARY LINE II（AUCB Studio4／イギリス）
　　BOUNDARY LINE（AUCB Studio5／イギリス）

SELECTED GROUP EXHIBITIONS and ART FAIRS
2015　箕面の森アートウォーク2015
　　（箕面公園および周辺施設／大阪）9 月予定
　　ART TAINAN 2015
　　（台南大億ランディスホテル／台南［台湾］／gallery CLASS）
　　ART FAIR TOKYO 2015
　　（東京国際フォーラム／東京／galerie bruno massa）
2014　CONTEXT（Art Miami Pavilion／マイアミ［アメリカ］／
　　galerie bruno massa）
　　かざる。アートとくらす。（REIJINSHA GALLERY／東京）
　　(e)merge art fair（Capitol Skyline Hotel／
　　ワシントンDC［アメリカ］／galerie bruno massa）
　　ART OSAKA 2014
　　（ホテルグランヴィア大阪／大阪／galerie bruno massa）
　　gallerism 2014（京阪シティモール／大阪／gallery CLASS）
　　TRANSNATIONAL ART 2014
　　（大阪府立江之子島文化芸術創造センター／大阪）（'11, '13）
　　ホルベイン スカラシップ選抜展Vol.2「2014春ー布石ー」
　　（REIJINSHA GALLERY／東京）
2013　Doors Art Fair
　　（インペリアル・パレスホテル／ソウル［韓国］／gallery CLASS）
　　EMERGING DIRECTORS' ART FAIR「ULTRA006」
　　（スパイラルガーデン／東京／ギャラリー空）
　　PRISM 2013（Contemporary Art Gallery Zone／大阪）
2012　dust – Postgraduate Show 2012（AUCB／イギリス）
2010　日本人作家招待展示（Rufus Lin Gallery／リッチモンド［カナダ］）

PROJECTS
2015　「箕面の森アートウォーク2015」実行委員（'13）
2014　Global Front Towerモデルルームに作品展示
　　（東京・港区芝浦、協力／REIJINSHA GALLERY, Tokyo）

001

Touch the boundary

“「市場」という日常的な空間の中”に開かれた“境界線の無い”ギャラリーに、境界線はほんとうに存在しないのか。市場に面した一面が、文字通り“開かれた”ギャラリーＺｏｎｅ。その空間を実際に触り（＝Ｔｏｕｃｈ）境界（ｔｈｅ ｂｏｕｎｄａｒｙ）を探ります。そしてその向こうにあるものは――？桜井市場という風景を、その境界のあたりに作家の行為の軌跡とともに描きました。見え隠れする色のヒントは、歩いて集めた市場のいろ。ほとんどを白で覆った壁に親切な説明的要素はおよそ見当たりませんが、作家の行動記録をスクリーン越しに眺め、そしてその境目を歩きながらそこで各々の記憶・想像力・イメージで実物と照らし合わせながら鑑賞していただくことを想定したインスタレーション作品です。行ったり来たり、その不安定な境目は観る人にどんな感触をもたらしたでしょうか。

002

Walking in Tenma Project

2014
200x200x38mm
各¥27,000

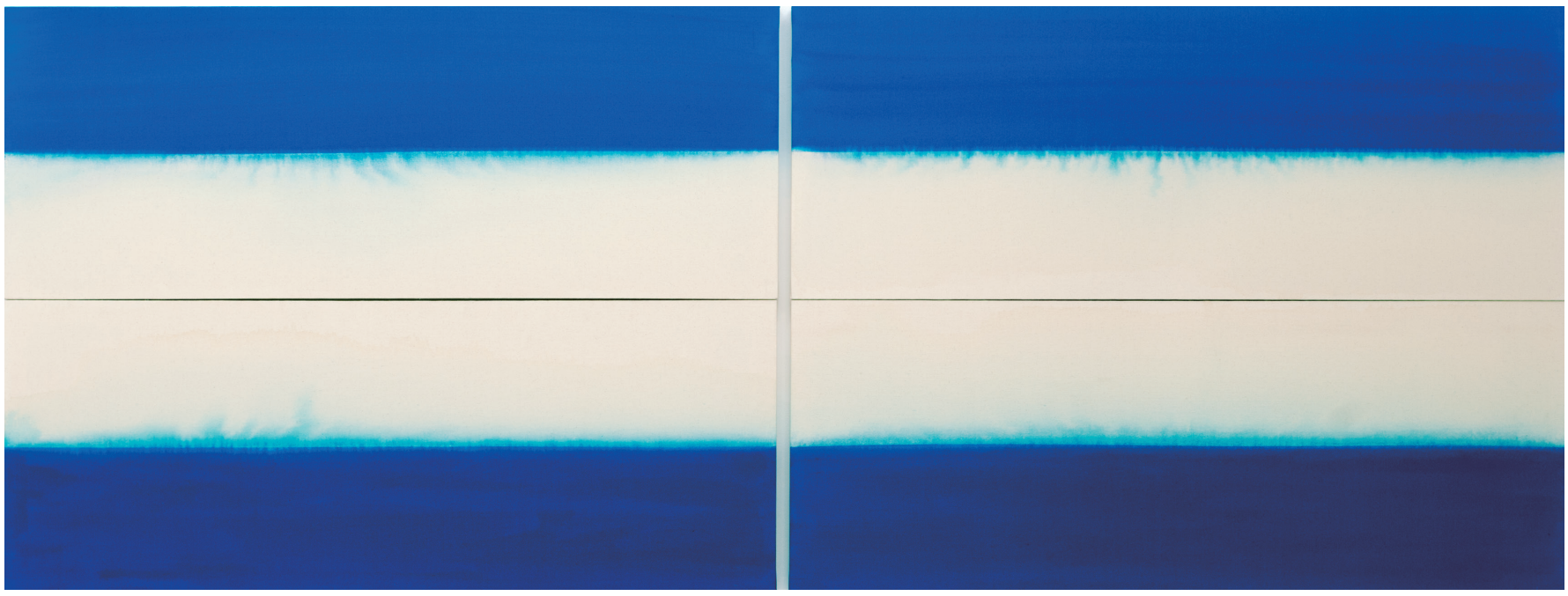
003

APRIL2014 #1(上) *APRIL2014 #2*(中) *APRIL2014 #3*(下)

2014
150x150x30mm
各¥16,000

004

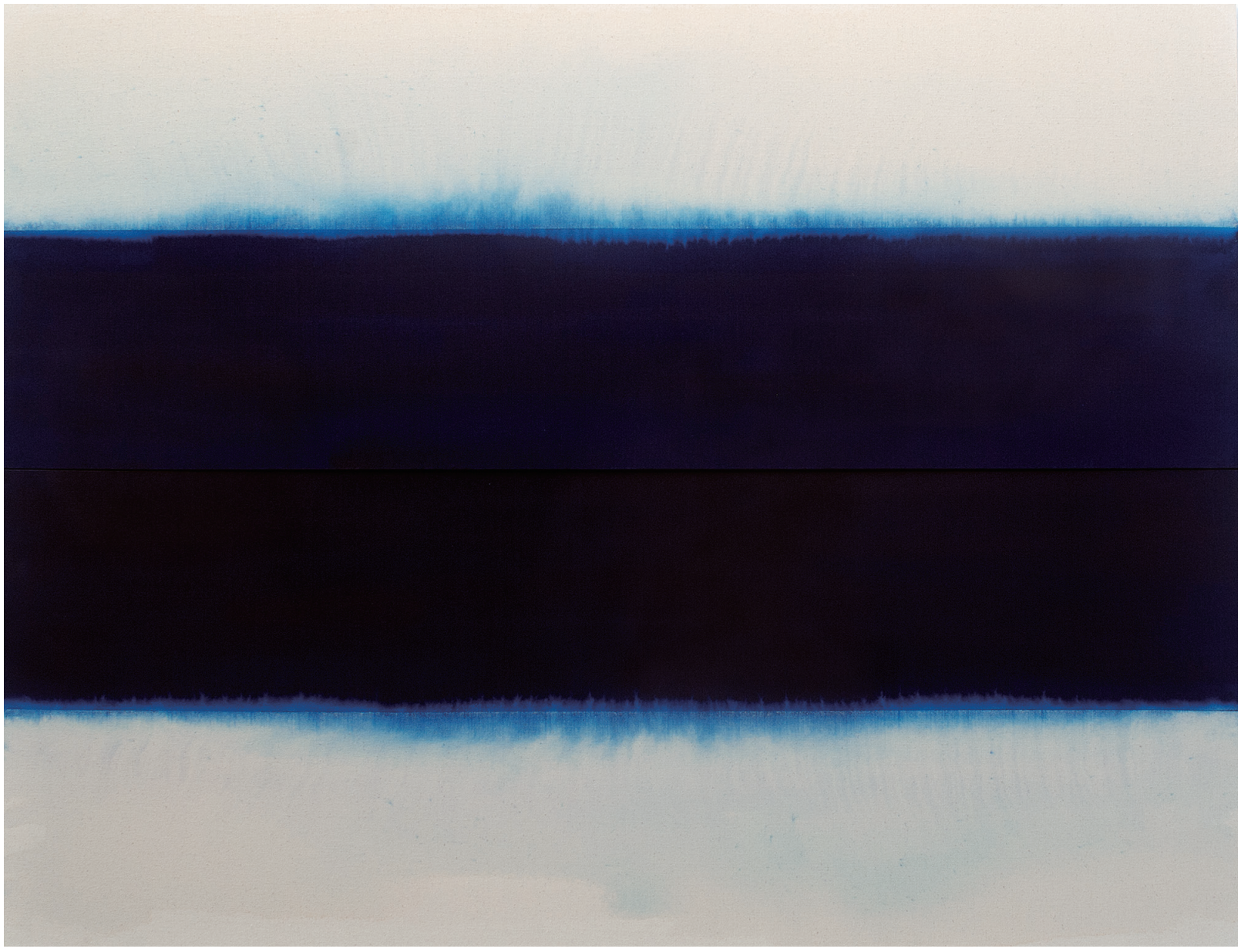
Boundary Line



2012
1450x550x45mm diptychs

005

Boundary Line



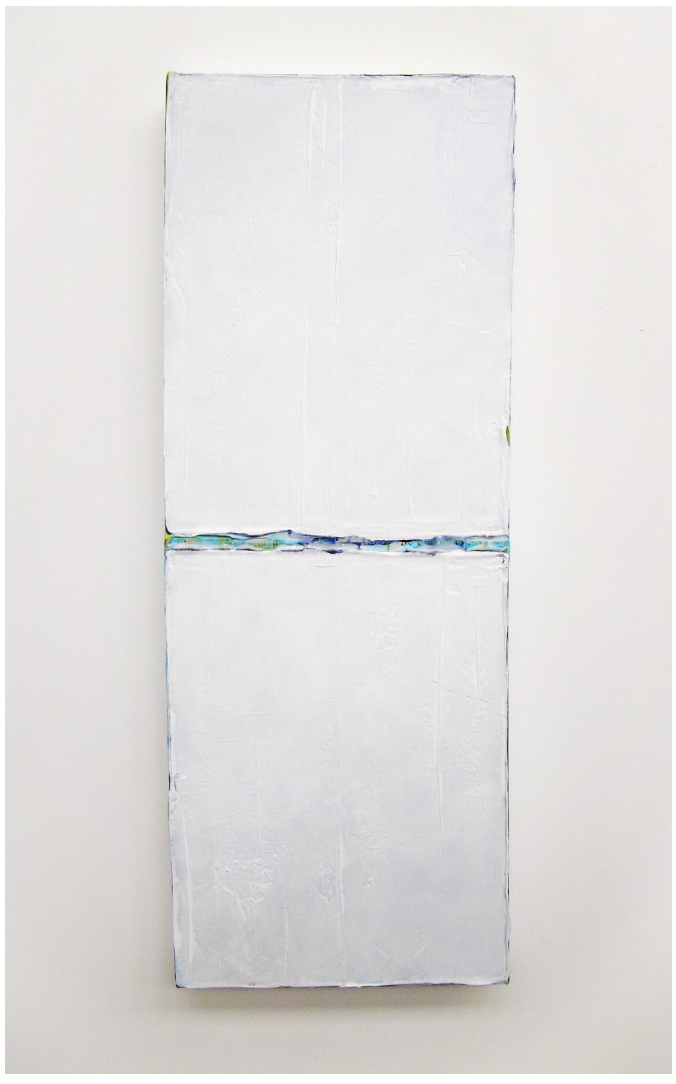
2012

1450×550mm diptych

006

Boundary Line

2012
300x800x45mm
¥70,000



007

Exp.16 (project1)

2011
380x150mm

ARTIST

Miki Wanibuchi

わにぶちみき

イギリスの原風景から描かれる、

海と空と世界の境界線

The boundary between the sea and sky, or the world,
is depicted from her original secenry in England.

text by Chiaki Ogura

どうして？ちゃんと見えてるでしょ？

Why? Can't you see it?

ライブペイントにお邪魔したとき、彼女は踊るように舞いながら絵の具を走らせていた。
その姿はまるで妖精のダンスのような華やかさ。
それと同時に、緑、青や紫などの美しい彩色が壁に映えてゆく。

これが作品なのかと思いきや、数時間後、彼女はその鮮やかな壁を白色に塗りつぶしていく。
思わず”もったいない！“と思った。時間をかけて描いた絵を、自ら塗りつぶすなんて。

見せていただいたライブペイントは、３面の壁を大胆に使い、２段階の工程を経て完成するものだった。
３面ともメインカラーとテイストが少しずつ異なっている。
この３面の壁それぞれの向こう側にある風景を撮影し、その中にある色を彼女が抽出し、
メインカラーに据えた上で表現しているからだ。
そして、第２段階目には、この風景自体を白く塗りつぶしていく。

「白色で塗りつぶすというこの過程自体が、私の表現。この時が一番楽しいです。
塗りつぶされたら下の絵が見えなくなるって？
どうして？ちゃんと見えてるでしょ？」
彼女は、いたずらっ子のような笑みを見せ、境界線を描きだした。

グリーン、パープル、レッド。彼女が世界から抽出した鮮やかなカラーたちに、白くて濃いベールがかかっている。

境界線を追い求めて

Pursuing the boundary.

美術家わにぶちみきさんの作品テーマは、「境界線」。
作家活動を始めてから、ずっと変わらないテーマで制作を続けている。
白や群青色、ターコイズブルーなどを用い、透明感とどこことなく儚さを感じさせる雰囲気の絵画が魅力だ。
絵を描き始めたのは、小学校４年生の頃。
塗り絵の出来の良さを母親に褒められ、絵画教室に入ったことがきっかけだ。
美術家として重要な、作品のテーマに大きく影響したのは、約1年間を過ごしたイギリス留学時代。
住んでいたイギリス郊外には自然が多く、徒歩５分圏内に海辺があるという恵まれた環境。
この場所を彼女はとても気に入り、ほぼ毎日通っていたそうだ。
どうやらそのイギリスの原風景が根本にあるようだ。
「朝も夜も海辺まで水平線を見に行っていました。一日中ぼーっと眺めていたこともあります。
ひとりで散歩しているある時、気付いたんです。この水平線とはいつも横に並んで歩くしかないんだなって。
水平線は英語で”Horizon”。同じ意味に、地平線という意味もあるんです。
それならばと、近所の公園に出かけるようになりました。
そこは、馬が何十頭も放し飼いされているような広大な公園で、地平線を追いかけることができたんです。
でもやっぱり辿り着けなくって・・・。その時の実体験が、今でもずっと記憶に残っています。
最近すごく凹んだことがあったので、頭冷やしたいと思ったときに、”ああ、海がない”と思いました。
水平線が見れたら、すごく落ち着くのになといつも感じます。」

穏やかさと情熱をかね揃えた彼女。感覚的な表現と
コンセプチュアルな視点を持ち合わせた表現者だ。

帰国してから、本格的に美術家として活動するようになり、
境界線を描く意識が、少しずつ変化してきたと話す。

「イギリスに留学する前は、水平線を風景の一部として描いていましたが、
帰国してからは、水平線を描くという意味の方に意識を置いています。
海と空ではなくて、その分ける線が大事だということに気づいたんです。
自分の存在している周りでは色んな音がしたり、雨雲が流れていたり波が荒れていても、
遠くの水平線の周りには静けさのみ。その穏やかな境目を表現したいんです。

色合いについてですけど、感覚だけで使ってしまうと実は、結構原色になりがちなんです。
朱色が好きみたいで(笑)。
けれど、好きな色だけで作ってしまうとワンパターンになってしまい、面白みもないので、
頭に浮かんだ最初の色は一度忘れるようにしています。
表現の幅を広げるために、日々撮り貯めた写真などをデジタル処理して、
色を抜き出すという、システマチックな動作・行程をいれることによって
自分の感性だけに頼らない色を使うようにしています。
そうやって抽出することで、面白い色が出せたらいいなと。
最初に原色を選ばなくても、私らしい表現になっているのであれば、
それは成功かもしれません。
自分の美意識にこだわって、制作しています。」

普段、彼女は、作家として活動しながらデザイナーの仕事も行っている。
どのように制作時間を生み出しているのだろうか、
どんな風に制作に打ち込んでいるのだろうか。

「美術家としての活動とデザインの仕事と遊ぶことは、切りわけています。
デザインの仕事をしていることが、絵を描く動機に繋がったり、
またその逆もあるのでいいバランスでやれているなと思います。
特定の世界に閉じこもるのではなく、社会や世界を客観的に見ながらも、
きちんとそれぞれに自分を属しておきたいと心がけています。

私は描こうと決めて描く方で、ほっといたら描かないんです(笑)
なので、展覧会予定があってから、よしっ！て気合いを入れて作品に向かいます。
制作をしていない間は、作品にならないアイデア出しのようなことはやっています。

例えば、先日友達にもらったクッキーを食べている途中に、
「時間を止めてみるって、どういうことだろう」って不意に思って、
9個分かれたケースに樹脂を流し込んで固めてみました。
固めてしまえばクッキーもそのまま残るし、友達の想いもそのまま残るなと思って。
他にも思いつきで色々やってみます。
そんなアイデアの素材が部屋にはたくさん転がっています。」

透明感がある透き通った声で、一言ひとこと
確認するように語ってくれる。

私の好きなもの

My Favorite Things.

今回の展示作品の一部に、風景写真のファイルがあった。
彼女がライブペイントをするために、リサーチ用に撮影したコンセプチュアルな写真たちだ。

「写真と旅行が好きです！
日常でいいなと感じた風景や場面を、写真で撮りだめています。
好きな作家の中に、ランドアートアーティストのリチャードロングさんがいるのですが、
彼の初回作品に、草原を歩いた痕跡を収めた写真と、
”1マイル歩きました、石をおきました、また1マイル歩きました。“
というような意味の詩があります。
この作品に触れた時、実際に自分の目で見て感じた工程をそのまま作品にするって、
凄いなと感じました。
私も追体験したいと思って、青森県の種差海岸を実際に歩いて感じたこと作品にし、
展示したこともあります。」

※リチャード・ロング（Richard Long、1945 年 6 月 2 日 - ）
イギリスの彫刻家・美術家。特にランド・アートに分類される作品を数多く発表している。（wikipedia）

「境界線」というテーマ。

彼女は、これからもずっとこのテーマで描きたいと話す。
追いかけても追いかけても、届かない、
だからこそ描き続けるのかもしれない。

「あのイギリスの水平線がずっと頭にあって、追いかけています。
また、水平線を見てるときに感じた
安心感のようなものを覚えています。
お母さんに抱きしめられた時みたいなものかな。」

わにぶちみき

Photo By Go Murahigashi @ Contemporary Art Gallery Zone 2014

WJAA5

ALCOHOL

Nine Leaves

ここは「ものづくりのディズニーランド」

Here is, so to speak, "the Disneyland of manufacturing"

ナインリーヴズ

text by Chiaki Ogura

滋賀で生まれたラム酒の新星

The new face of rum has appeared in Shiga prefecture.

「NINE LEAVES（ナインリーヴズ）」というラム酒がある。

ラム酒は、カリブ海に浮かぶ西インド諸島各国が主な生産地で、もともとコーラや柑橘系ジュースと割って、カジュアルに飲まれ、代表的なカクテルには、モヒートやキューバリバーなどがよく知られている。そのラム酒が日本国内、しかも関西で作られているものがあるという。国内にも数カ所あるラム酒蒸留所のうちの一つ。それがナインリーヴズだ。出会いは大阪・扇町のBAR C-COVOだった。

代表銘柄「CLEAR（クリア）」を、フランス製の端正なガラスボトルから、グラスに注ぐ。華やかで、ほのかに吟醸香のニュアンスがある味わいは、その名の通り“CLEAR”だ。芳醇な香り、雑味の無いクオリティはまさに「上等なお酒」。今までのカジュアルなイメージががらりと変わってしまった。

一体どんなふうに、このラム酒は作られているのだろう。

蒸留所があるという滋賀県大津市石山を訪れてみた。

出迎えてくれたのは、創業者の竹内義治さん。

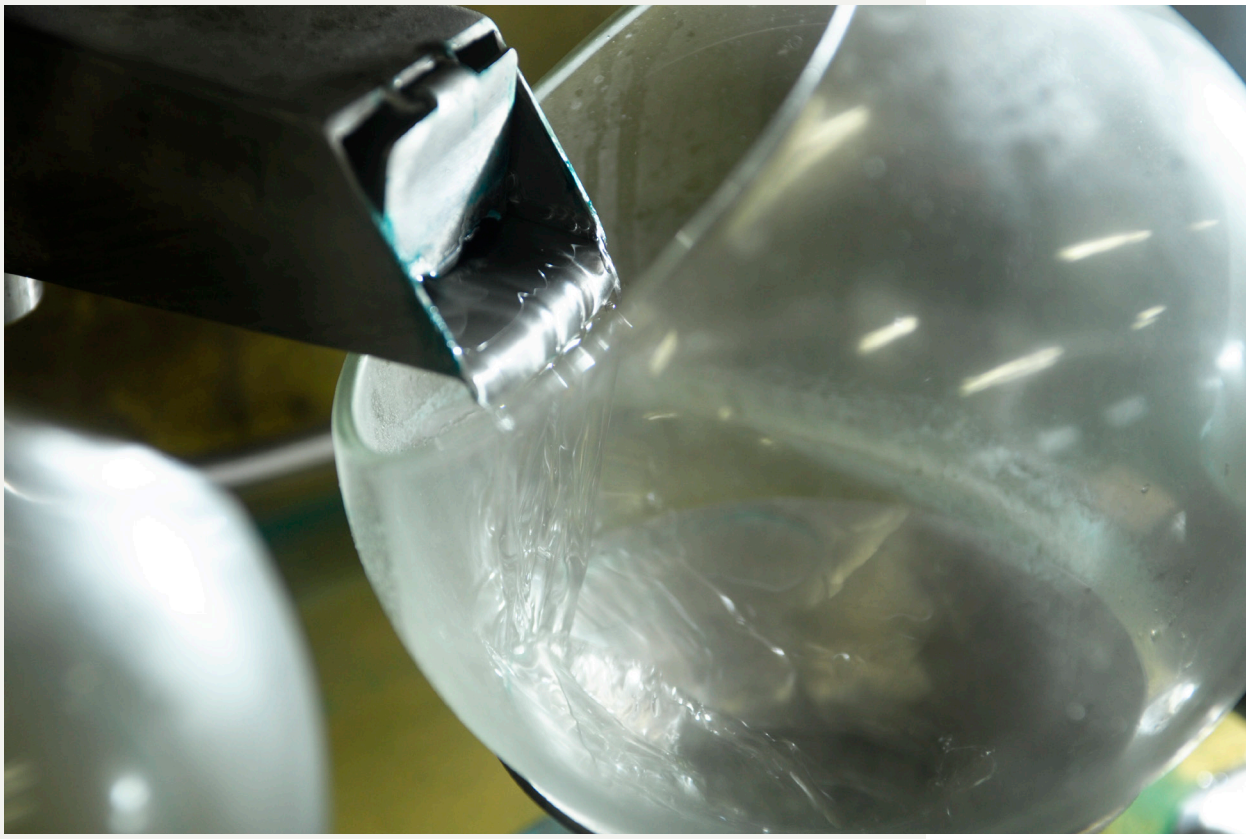
「作業しながらのご説明になってしまいますので、
話の途中でいきなりいなくなっても怒らないでくださいね(笑)」
竹内さんはハキハキとした口調で話し、一旦離れますと言い残して、再び樽を運ぶためにリフトまで走っていった。
なんと、竹内さんは原料の発注～蒸留～梱包までの何段階もの工程をすべて一人で担当している。
蒸留所には「もろみ」の仕込みから熟成に至るまでの全行程が行える、仕切りのない空間が広がっている。
一人で動きやすいような動線を考え、設計図面も本人が書いたというから驚きだ。

竹内さんの経歴で興味深いのは、異分野からの転身という部分だろう。
生家がずっと酒づくりを生業にしていたわけでもない。
もともと祖父の代からの家業である某大手自動車メーカー関連部品の製造に携わっていたが、
ある時をきっかけにラム酒の製造販売に興味を持ち、この蒸留所を立ち上げた。

「ずっと日本のものづくりに携わって働いてきました。
けれど、自分たちが作ったものは、基本的に納品してしまうと、お客さんには
納品した会社の商品としてしか見られないことに、何となく寂しさを感じることがあって…。
最初から最後まで自分が携わって生まれたものが、
直接、お客様に選ばれる所を見たいと強く思うようになったんです。」

（上）リフト運転もお手の物。運んでいるのは、お気に入りのカリフォルニアワインのウェンテの樽。（下）沖縄産の黒糖は、ネットで出合うべくして出合った運命の砂糖。

再留を行う現場。時間や湿度、気温によって変わる風味を確認する。



なぜ、ラム酒なのか

Why rum?

ラム酒は、廃糖蜜やサトウキビの絞り汁などを発酵させてアルコールをつくり、
それを蒸留するという工程でアルコールを抽出する。

長年の経験や、鼻や舌の感覚が要求されるワインや日本酒などの醸造酒と違って、
これまで自分が培ってきた製造管理の方式が、
蒸留酒の工程に多くあてはまる。
このことは、起業を後押しする大きな理由のひとつになった。

「モルトウイスキーも蒸留酒なのですが、既に有名なメーカーさんがあります。
自分の力が最大限に活かせる市場はどこにあるのかと考えた時に、
ラム酒が浮かびました。
まだ日本のラム酒の市場も大きくなく、製造規定もそこまで厳しくない。
自分なりの味を追求しやすいお酒なのではないかと考えました。」

つくりたい味のイメージを、竹内さんは頭の中に強く描いた。
ウイスキーのような味のバリエーションをもちつつ、プレミアム感のあるラム酒。
主役となる蒸留器には、ウィスキー有名銘柄のイチローズモルトや
グレンモーレンジでも使われているスコットランドの名門蒸留器フォーサイス社を選んだ。
蒸留器のロールスロイスといわれているものだ。
オーダーの際には、直々にフォーサイス社に足を運んで、
イメージするラムの風味を伝えた。

「一般的なステンレス製ではなく、銅製にこだわりました。
洋酒のような味わいを目指し、硫黄臭をなるべく抑えたいからです。」

こだわりはそれだけではない。
ラムで一般的な廃糖蜜ではなく、沖縄県産の黒糖を１００％使用し、
蒸留所のそばにある長石鉱山の地下50ｍから湧き出る、硬度12の超軟水で仕込んでいる。
雑味を極力無くし、クリアにすっきりとした
甘みのあるラム酒の完成形をイメージして厳選した原料。
相性のいい国産酵母との出会いもあった。

そして、酒類製造免許を取得した２０１３年に、NINE LEAVESを立ち上げた。

スコットランドの名門蒸留器フォーサイス。
銅色の風合いが何ともいえない。

5分おきに繰り返すテイスティングは、約15回程繰り返す。
常にぴりっと張りつめた緊張感がある。

私たちと話している間も、竹内さんは止まることなく動き続ける。
それもそのはず、どの工程もタイミングが命なのだ。
機械の動く音、水の出る音、様々な音が響き、終始ピリっとした緊張感が漂っている。
そんな中、次第に甘いお酒の香りがしてきた。

最終工程である再留は、蒸留酒造りの醍醐味の一つだ。
水蒸気の圧力をコントロールしながら、最初の蒸留で抽出されるアルコール濃度は約18%。
そのあと再留にかけ、アルコール度数は58%になる。
階段を少し登って再留のチェックを行う場所は、理科の実験室のようだった。
味の変化を確認するために、5分置きに専用のテイスティンググラスで香味を確認する。
15回ほど繰り返すのに、約1時間程。
焼酎のようだったり、香りが強かったり、段階を追って味わいが微妙に変化する。
黒糖由来のスパイシーさが出てくれば完成だ。
全行程を終え、安堵の笑みを見せてくれる竹内さん。緊張が次第にほどけていく。

「タバコ、葉巻は大好物！銘柄はpeaceをよく吸います。
再留が終わったときに、一服します。工程が無事にひとつひとつ終わった時は、一番至福のときですね。」

こうして“NINE LEAVES”はできあがる。

グラスを見つめるまなざしは、真剣そのもの。
色、とろみ感、味や香りを瞬時にチェックする。

独りでやる理由

The reason why he does alone.

「僕にとって、この場所は”ものづくりのディズニーランド”。
自分のやりたい全ての要素がここに揃っています。楽しいです(笑)。
金メダルを取るとか、常に同じ味を保つことよりも、ここで出来ることや新しい発想があれば、
基本のレシピにプラスしつつ、突き詰めながらラム酒をつくる作業自体が喜びです。

一時期、夢中になりすぎて、味覚障害に陥った時があります。
急に甘みがわからなくなって。
甘いお酒を作っているのに、甘さがわからないっていうのは致命傷だと、
医者にあわてて駆け込みました。
それからは、生産計画を厳しくしすぎず、ペースを保って続けています。」

ひとりでやり続けることは、大変ではないのだろうか。
その意義は、何だろうか。

「世の中ひとりでやってる方はたくさんいます。歯医者さんもバーテンダーさんも美容師さんも。自分が最初から最後まで、責任を持てるものが作りたいという想いが強いと思います。なので、生産量も酒税法ギリギリ最低ラインを維持できる量に保っています。責任を持ってものを作るためには、全部が見えてないといけない。人にお任せするということは、そのひとにやってほしいことをちゃんとやってもらえる作業環境を整えなければいけないということ。まだそれが出来る状況ではないので、ひとりでやっています。」

竹内さんは常に海外を視野にいれている。
元々家業であった自動車部品の製造も、海外を視野に入れた産業であったことが理由のひとつかもしれない。
海外で評価されるものづくりをしたいというのが、竹内さんの目標でもある。
そしてその目標は、国産ラム酒として初の海外賞受賞を皮切りに、
２０１４ジャーマンラムフェスティバルでは新人賞を受賞し、着実に実現している。
自分なりのやり方で日本のものづくりを継承していきたい。
これからも竹内さんの、愉快で真摯な挑戦は続く。

「海外で認められるラム酒づくりの基盤をつくって、次の世代に繋げていきたいですね。
そんな想いも込めて、銘柄のナインリーヴズは、竹内家の家紋「九枚笹」をモチーフにしています。
将来、自分が海外でバーに行ったときに、隣に座っていた外国人が何気なく注文するお酒が
NINE LEAVES だったら最高ですね。ワクワクします。」

N I N E　L E A V S　竹 内 義 治

Photo By Go Murahigashi

わにぶちみき×
NINE LEAVESの
マリアージュ

Mariage of nine leaves and miki wanibuchi

mariage

わにぶちみき

作品名：TANESASHI2013-11 /2013

400x400x30mm　￥70,000

NINE LEAVES| 竹内義治
“CLEAR”（ナインリーヴズ クリア）
¥4,860（税込）

境界線を行き来するふたり

The two coming and going over the boundary.

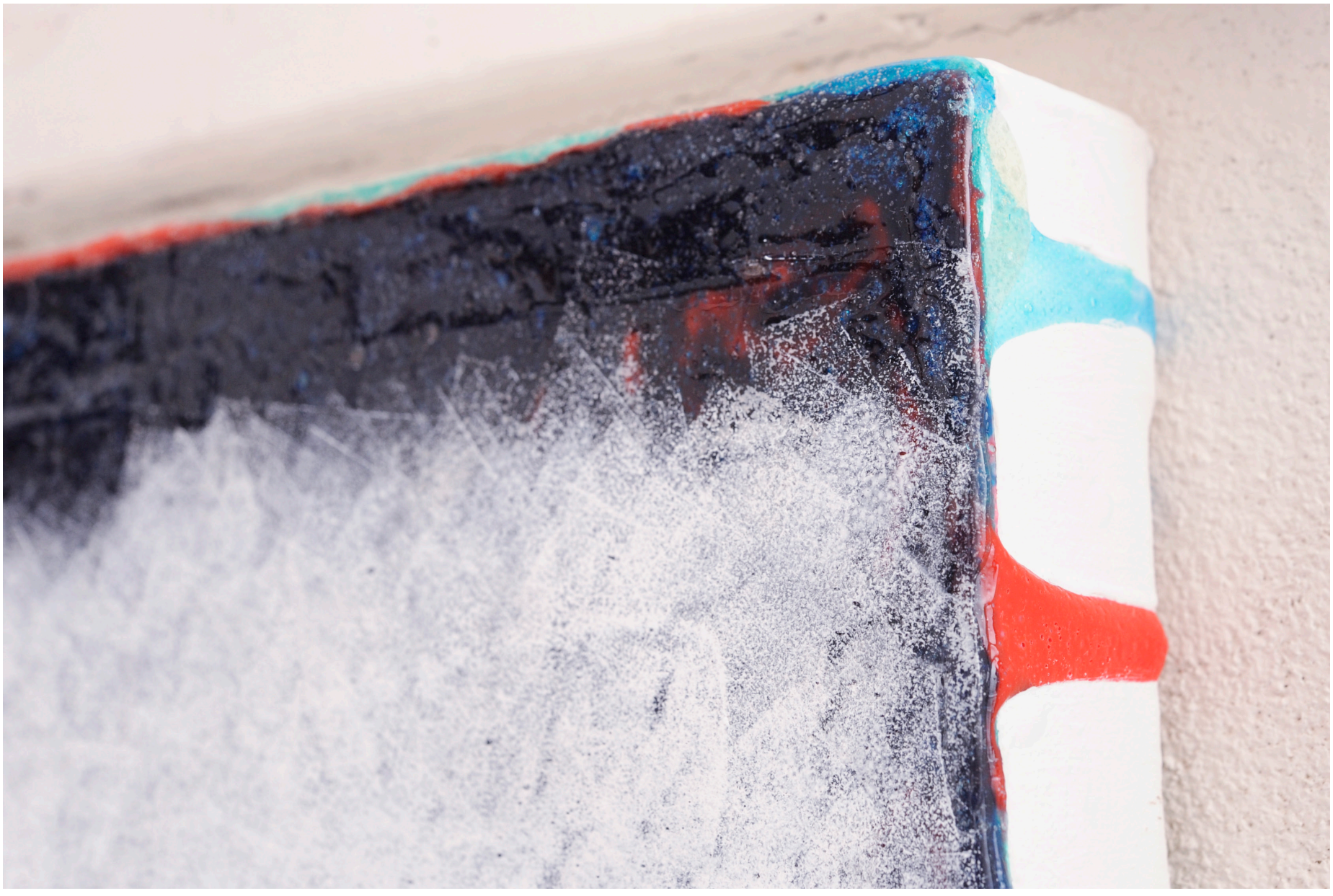
私たちには鮮やかな赤に見える花も、ミツバチが見えている色と同じではない。
今見えている色は、本当にその色なのだろうか？
わにぶちさんは、そんな視点で日常からエッセンスをつかみ出す。

キャンバスに描き出されるのは、いつかの原風景と果てしない境界線。
それは、海と空を越えて、想像の世界まで続くものかもしれない。
彼女は、境界線の在り処を探し続けている。

仕込みから熟成までの工程の中心には、蒸留器がある。
黒色でゴツゴツした黒糖からは想像もつかないような、
無色透明でなめらかなラム酒が生まれてくる。それはまるで魔法のようだ。

竹内さんは、真剣なまなざしでテイスティングを繰り返しながら、
ラム酒の行方を見つめる。
過程までも存分に楽しむ彼は、今日も蒸留器という境界線に居る。

TANESASHI2013-11
わにぶちみき
400×400×30mm アクリル／キャンバス
¥70,000



Sincerely Made, Rum from Japan
NINE
LEAVES
CLEAR
2014
Alc. 50%

重なりあう二つの境界線

Two kinds of boundary seem to overlap each other.

ひとつの絵の前に座っている。
様々な色が塗り重ねられた上に、真っ白な絵具が乗せられている。
表層にこそ出ないが、伝えられない秘めた感情が、
静けさの裏にうごめいているかのようだ。
隙間から少し見えるその色合いに、想像力をかき立てられる。
もっと向こう側がみたい、と。
絵を眺め、グラスに注いだラムを、ゆっくりと舌で転がして味わう。
そして竹内さんの姿、言葉を思い出す。
作りたいラムがある。だから、自分で作る。
考え抜かれ、磨き抜かれたNINE LEAVESは、グラスの中で反射し、輝く。
この色の向こう側には何があるのだろう。
NINE LEAVESの向こう側には、味わった人にしか分からない
透明な香りが広がっていた。
彼女、わにぶちさんの描く境界線の向こう側に想いを馳せ
更にグラスを傾ける。
自分だけの至福の時間。

2015.3.14

編集後記

Art-direction&Design　中塚 保裕 Nakatsuka Yasuhiro

アーティストとお酒の組み合わせは、悩む時もあればスッと決まる時もあります。今回は後者で、ナインリーヴスを飲んだ瞬間、わにぶちさんの作品が浮かびました。取材とテキストはわにぶちさんと同じ場所で出会った小倉さんに快諾して頂きました。ナインリーヴスの竹内さん、森さんには取材前後も細かにご対応頂きました。感謝。蒸留所への取材に同行出来なかったのが心残りですが、今号も多くの方の協力のもと、無事に完成しました。楽しんで頂ければ嬉しいです。

Writing　小倉 千明 Ogura Chiaki

素敵な取材先とメンバーに恵まれ、素晴らしい本を作ることが出来ました。関わった全ての皆様に感謝しています。”ものを生み出す”方の信念に触れ、自分自身についても考えさせられるきっかけになりました。いやはや、それにしても、産みの苦しみってこんな感じ？

Photo　村東 剛 Murahigashi Go

お問い合わせ先

わにぶちみき wanibuchi miki
http://www.mikiwanibuchi.com

NINE LEAVES
http://www.nine-leaves.com

次回配信予定は2015年夏頃です
お楽しみに！

Next issue will be distributed in the summer of 2015.
Don't miss it!

掲載内容の無断使用を禁止します。
Copyright (C) 2009-2015 nakatsuka yasuhiro All Rights Reserved.